

大学でこんな楽しいことを やってもよかったの？

「私らしさのワークショップ」から

(上)

1 癒しの大学開放を めざして

ばくは、自称「癒しのサンマづくり」提唱者である。詳細は自著「癒しの生涯学習—ネットワークのあじわい方とはぐくみ方」(学文社、1997年4月・1998年3月増補を参照していただきたいのだが、いづれにせよ、人間はなぜ生きるのか」という問いへのものとも有効な答えの一つが「癒されること」であるという気持ちで本書を書き通した。しかし、同時に、本書では癒されるためには、

① 自己決定の水平異質交流のサンマにおいて、

② 他者とともに信頼・共感の居心地のよさを味わいながら、

③ 社会貢献も含めてボランティア(自発的)に共生創造主体として生きる、以外に方法はないという主張もしている。

前年度から、ばくは、徳島大学大学開放実践センターに勤めている。そこでも、大学教育や、その重要な一環としての大学開放において、「癒

しのサンマづくり」が重要であるという思いを強くしている。①家族関係の病理、②教育システムの弊害、③内なるピアコンセプト(同一化)に向かう仲間意識によって個人が傷つけられ続ける現代日本において、大学の授業にせよ、市民のための大学公開講座にせよ、真実に気づくことによって、あるいは他者との意味ある出会いをすることによって人間が癒されることの意義の大きさを、大学教育側は十分理解する必要があると思う。

それは、最近の悲惨な暴力的事象を考えても、逆に市民の自己決定活動などにおいて見えてきた共生への展望を考えても、緊急の課題といえるのではないか。また、これは、大学教育において最近ますます軽視されがちなベラルアーツ(一般教養)の教育的意義の再評価にもつながると思われる。

「サンマ」とは時間、空間、仲間の3つのマ(面)のことで、本来は、子ども会関係者などが「今の子ども」として「遊びのサンマ」が欠けている」と提起したときの言葉である。たしかに、今の子どもたちは、与えられた課題をこなす時間の過密化

による自由時間(時間)の不足、冒険できる場(空間)の不足、群れて遊ぶ友達(仲間)の不足にあえいでいる。しかし、青年や大人たちはどうだろうか。子どもたちと同様にサンマの不足にあえいでいるではないか。ゆ

っくりしたい、自分らしさを取り戻したい、本当の友達がほしい……。ばくはそこで現代人が求めているものを「癒しのサンマ」と呼ぶ。サンマであるから、日常の家庭・学校・職場のすべての時間を癒しの時間に当てようというわけではない。せめて一週間に1回くらいはサンマがあつて、「ああ、〇曜が近づいてきたな」と思えるだけでも、その一週間を元気に暮らせると思うのだ。

生涯学習の学習方法についても、とりわけ「集団学習」について、その観点から問題提起したい気持ちがある。ばくには強い、「集団学習」とは、集合学習のうち、団体活動や学級・講座などの学習者同士の相互教育が期待される学習方法である。集団という全体主義的なマインド・イメージもあるが、現代の人々が求めているのは、集団というよりもゆるやかな人間関係のネットワークによる癒しのサンマなのだと思う。もち

らん、きのうの自分より今日の自分が、また一つ大きくなった、または寛容したという成長の喜びにも大きいものがある。しかし、もう一方の「他者が両手を広げて歓迎しあえる」という現代社会では突出的ともいえる無条件肯定の関係性も、自己成長と並んで重要な生涯学習活動の魅力ととらえるべきであらう。癒しのサンマでは、あるいは知的水平空間では、批判さえも、相手の気持ちを考えての心を痛めながらの批判であり、相手の存在の否定にはならないのである。

2 自己中心主義の評価

それにしても、癒しというと、一般的には後向きにとらえられるかもしれない。しかし、ばくがこの本でいいたかった「癒しの生涯学習」は、後向きの価値観を最初から排除することはしないもの(そこが従来の教育の価値観と違うところである)。結果としてはむしろ前向きに終わるであらうものである。ここでの後向きとは、「口は災いの元、だから表現しない」などの敗北主義、前向きとは「表現して、わかりあり

現代人が求める「癒しのサンマ」

ればすばらしい、わかりあえなくても仕方ない」というネットワーク型の態度を指す。そもそも「癒しのサンマ」という言葉には、人に傷ついたあと、人から逃げるのではなく、人とのネットワークによって癒し、癒されようとする「前向き」な志向が含まれている。この前向きさは尋常ではない。

だからこそ、何らかの理由で傷心している学生のなかには、そういうばくの主張を嘆き取って、ばくの授業が一番疲れるとか辛いとか訴える学生が例年、出現するのであらう。一部の敏感な今の学生のなかには、次のようにいうものがある。「癒しの生涯学習」という言葉が悪いのではない。それよりも、それで私がほんとに癒されるの? 私たちはよくと信じる気にはなれない。社会教育現場でよく言われがちなあなたの立場を考えれば、癒しのような個人的なことがらはなるべく避けて、地域や社会の改善のための学習をすべきだ」という言葉などより、彼

女の言葉は、自己の臨牀的真實に基づいた実感の伴った「私メッセージ」になっているのである。

先日、A市公民館職員の日発的な勉強会が主催する会で講演をした。そこにばくを呼んでくれたSさんが、インターネットのメーリングリストで、次のように事後報告をしてくれた。

実は、公開講座のある参加者に、「癒しはエゴだ」「なぜ公民館で癒し」という利己的な課題を取り上げなければならぬのだ」「あなたたちの作ったピンクの表紙の冊子は、「公民」というところが出ていてよかったが、なぜみとちゃんを呼んだのだ等等」ということを言われた。midito理論をまだ十分に思想化できていない私は、「たぶんmiditoさんは、エゴで何が悪い」と言うと思う」「miditoさんは、癒し」という私的課題と、社会貢献ということとを、統一させることをめざしているのだ」と反論するのが精一杯でした。おそらく、批判者は「現実から、

癒しへ逃げるのではなく、現実と格闘せよ。そこから自己のアレンジ・テイテイを確立せよ」「現実から逃避しようとする、今の「やさしい」若者達はいずれ破綻せざるをえない」というような考え方なのだと思います。

これに對しばく(midito)は次のようにレスポンスした。

すみません。そういうわたとき、いわれたほうはどういうふうにするのかに共感すればいいかということについて、ばくの考えを述べます。公民館なんだから「公民」であるべきだ、と思っている人の信念と、「いや、じつは癒しのサンマの創出こそが、現代社会において突如的な公共的課題なんだ」と思っている私たちの信念と、どっちが真でどっちが偽か、という争いをした場合、これは不毛な結果に終わるでしょう。そんなつまらないことよりも、そのクレームをつけてくれた人自身」が少なくとも公民館においては自分分は「公民」として学習したいと心から思っている。その「実感」につい

ては、私たちはだれもあざけったり、否定したりすることはできないと思います。いや、むしろ、それはそれでとてもすてきなその人の人間としての可能性といえるのではないのでしょうか。

このように考えれば、多くの住民の存在を肯定的にとらえることができるでしょう。すなわち、「個の深みこそが、私たちの出会うべき焦点である」ということとす。

また、Sさんは次のようにも書いてくれた。

ちなみに、私がmito理論に惹かれたのは、「ミイズムのどこが悪いのか」「あなたはあなた、私は私」という主張に「癒し」を感じたからなのだと思います。

これに対しては次のようにレスポンスした。

ばくもそういふばく自身の思考方法に魅力を感じていきます（へんな表現ですね）。人間は自分自身（の存在価値や生き方や快感に

とてつもない関心を払って生きている存在だから、出会ってもおもしろいのじゃないでしょうか。もしそれがなければ、自殺も考えないし、嫉妬もしないし、犯罪も起こす気にならないつまらない存在に陥ります。そこでの葛藤に人間の真実がある。もちろん、ほんとうは自分を中心にして地球が回っているのではない、という気づき（これを、楽園追放」という）は、大切。しかし、その気づきの上で、なお、それでも自分の人生を大切に生きていきたいという住民の欲求の実現を支援するのが社会教育職員の役割なのではないでしょうか。

そのためには、利他的利己主義という言葉がとてつもない強力なヒントを与えてくれると思います。自己中心主義どころか、利己主義であってもいいじゃないですか。真に自己の快感欲求を充足しようとするのなら、一週間に1回ぐらい癒しのサンマという「おうち」を得た上で、さらには「社会貢献も含めてボランティア」（自発的）に共生創造主体と

して生きる以外に方法はない（「あ、また言っちゃった」といえるでしょう。公民館には、住民がそういうことをできるチャンスがいっぱいあると思います。

それから、最初の「あなたたちの作ったピンクの表紙の冊子は、「公民」というところが出ていてよかったが、なぜみちちゃんを呼んだのだ」と言ってくれた人について、その人が公民館で「公民」として活動することによって「利他的利己主義」が満たされているというその人自身の実感の言葉をしゃべってもらえば、これはとても意味のあるけんちゃんとその人との出会いに転換することができると思います。やっぱり、人間っていつかは死ぬし、つまり人生って有限なんだから、デイベートのようなつまらない時間より、意味の充満した時間を過ごしたいですよ。

これから報告する「私らしきのワークショップ」も、市民の実感の伴

う「自己中心主義」を振り起こし、「癒しのサンマ」の提供と、その作り手としての自己変容につなげようとしたものである。

3 公開講座「私らしきのワークショップ」

ばくが勤め始めた平成10年度、徳島大学大学開放実践センターの公開講座は13年目となり、約70科目の公開講座を市民に届け、夏季・冬学期講座、土曜・夜間講座の拡充、リカレント教育講座の新設、郷土関連の講座の拡充、放送公開講座に連動した講座、市民と高校生がともに学ぶ講座などに重点的に取り組んだ。そこでばくが企画した講座が「私らしきのワークショップ」である。その趣旨は次のとおりである。

現代人の生涯学習に向かう主要な動機の一つとしての「自分らしさ」の危機と、それへの願いを取り上げ、参加者一人ひとりの臨場的真実を引き出しながら、生涯学習、ボランティア活動、市民活動等の自己決定活動のあり方を明らかにする。

このワークショップ

能動的な「楽習」を社会に返す

により、「笑い声の絶えない」「一人ひとりが自然にその気になる」「ような成人の能動的な「楽習」を実現するとともに、地域的なキーパーソンを育て、インターネットを通して、その成果を、大学や社会全体にアピールする。

秋学期でのパンフレットの市民に向けたメッセージは次のとおりである。

私らしきってなんだろう。自分が学びたいことを、学びたい方法で、学びたいように学ぶ生涯学習が大切にされる今日、若者、サラリーマン、主婦など、たくさんの人が、生涯学習活動のほか、ボランティア、市民活動などの自己決定の生き方を味わっていらつしやいます。

この講座では、ワークショップ方式をとり入れ、もう、やつてるよという人も、「ちよつと照れるぜ」という人も、対等の立場でいっしょに講座をつくっていき、楽しく学ぶことを通してワーク、ドキドキしながら、自分らしさを発見します。さらには、その成果をインターネットで発信することも計画しています。

冬学期は次のとおりである。

私らしく生きたい。あるがままの自分が両手を広げて歓迎されるサンマ(時間・空間・仲間)のサンマが、現代社会のなかで生まれつつあります。

この講座では、秋学期に引き続き、ワークショップ方式をとり入れ、癒される「楽習」(楽しく学ぶこと)のあり方を探っていきます。今回はそ

れを図解する作業を試みます。そこで作られた成果は、インターネットでも発信する予定です。

各回のテーマと要点は図表●のとおりである。なお、それぞれのワークショップの技法については前出「癒しの生涯学習」のほか、「こころ生涯学習」に詳しい人、いりません」(学文社、1993年3月)を参照していただきたい。

また、講座閉講中も、火曜日についてはセンターにて自主的な集まりをもつことができることとした。

図表 私らしきのワークショップのテーマと要点

秋学期

回	各回のテーマ	要 点
1	私らしきってなんだろう？	自分さがし(の相互承認の出会い＝第一印象ゲーム)
2	コミュニケーションはキャッチボール	共感能力を高める＝ブレインストーミング(幸せの瞬間)
3	さわやかな自己主張	引っ込み思案をなおすコツ＝ロールプレイ(お願いトレーニング)
4	自分のためのボランティア	自分らしさを感じる＝価値観ゲーム＋スクエアゲーム
5	まとめ＝楽習の達人になる	自分らしさを表現する＝インターネットで発信！

冬学期

①	見比べあう自己紹介を蹴飛ばせ	自分らしさの出会い＝楽しい自己紹介の方法
②	伝える方法・わかりあう方法	自己表現の技術、相手の自己表現を支援する技術＝ジェスチャー大会
③	楽習図解ワークショップー自分のための社会貢献ー	ひとの幸せは蜜の味・・・それってきれいごと？
④	Ⅱー楽しい学習と双方向教育ー	学習と教育の間に流れる暗くて深い河をわたる方法
⑤	Ⅲー自分らしさを世界に発信！ー	楽習の図解の成果をインターネットのホームページとして作成し、送信する。

図表 私らしきのワークショップに集う市民のニーズ

現代人一人一人からの視点

- ①自己否定じゃ生きていけない
→自己一致と「癒しのサンマ」
- ②ほんとうの意味で出会いたい
→自己受容とエンカウンター
- ③ともに生きる方法を見つけない
→自立と依存のネットワーク

これはあとになってメンバーから「裏講座」と名づけられ、毎回の「表講座」の終了後に行つた、フリースペースとともに、自然体の交流ができたように思う。ばくなどは大したアカデミズムをもっていない人間だが、それでも教員の研究室や、ときには自宅にまで押しかけて自然体の交流をするという現役学生の大いなる特権を、学生ではない市民にも味わってもらえなというところは、「裏側の大学開放」として重要だったと思う。本稿では、その成果についても報告したい。

それぞれの回に対する受講した市民の対応(出席ペーパー)を通して特徴的なことは、「大学でこんな楽しいことをやってもよかつたの？」

というペーパーに象徴されるような、現代人としての市民一人一人の大学開放を通じた生涯学習への関心であり、とりわけ講座自体を「癒しのサンマ」の一つとしてとらえようとする信頼、共感、自立に向かう潜在的願望である。そこで感じられる市民のニーズは前頁のようにまとめられよう(図表●)。

4 他人に関心を寄せる ことの意味

秋講座第1回は「第一印象ゲーム」(坂口順治・実践・教育訓練ゲーム)・日本生産性本部を行った。ばくのねらいは次のとおりである。

- ①自分らしさとは何か、考える。
- ②人と会おうというとは何か、考える。
- ③相互承認の人間関係づくりのコツに気づく。

次のような出席ペーパーが提出された。なお、m i t o 以下はばくが次の回で行ったコメントの内容である。これらはすべて受講者にインターネットメールで随時フィードバックした。

■最初はドキドキ、どうなるんだろ
う、など、自分がいちばん不得意な

パターンのゼミかな、と思ったのですが、いろんな人たちがいて、これからが楽しみです。でも、今日は、少し時間が短い感じがしました。

m i t o 初対面なのにいきなりやるの?、ということでしょうね。指導者はそういうマイナスの気持ちを大切に保っていてほしい。それから、時間については、ばくがじつは「詰め込み主義」になっちゃう癖があるんです。勝負のかけすぎ、というところかな?

■できることから始めよう。
m i t o さん? 始めの一步の話ですか? それなら、ばくも「大胆」にはなく、何cmかをおずおずと踏み出すのがコツ!

■第一印象ゲームはおもしろかったです。これからどんな講座になるのか楽しみです。

m i t o はい。あれは坂口順治さんの本からのパクリですが、妙に自然で、自他への肯定的な関心が高まるゲームだと、ばくも感じています。

■第一印象ゲームが楽しかったです!! でも、自分の見る目って、案外ないなあーと思いました。あまりにも当たらなかったの...。学生時代に戻ったような新鮮さがあり

ました。

m i t o うーん、学生時代に戻った...。授業ですか、友達関係ですか?

後者が大きいのでしょうか。友達は何歳になってもほしいのに、卒業就職、結婚、出産などがあるたびに、どんどん減っていく。とくに異性の友達が。

■第一印象ゲームでは、自分の第一印象があまりあてにならないのでは、と思った。第一印象にこだわらず、人とおつきあいていきたいと思つた。グループ内では雑談などして、とても打ち解けたように思つた。

m i t o 偏見の恐ろしさ、というところでしょうか。それから、雑談も、歯の浮くような社交辞令と違つたからこそ楽しかったのではありませんか。

■「他人に関心を寄せる」、その言葉にいまさらですが、なんとなく、意外にも得心したりしています。講座のあとと時間を割いてくださり、集まると聞いて、なんだかわからなけれど楽しみな気分です。

m i t o 比べる視線ではなく、その人のありのままへの眼差し、これがもたらいたほうが、あげたほうが、気持ちいいんでしょうね。これを肯定的ストロークといいます。もしか

したら、さらに無条件肯定的ストロークの雰囲気が出てきつたものかもしれません。

■人前に出ることが少なく引つ込み思案の私でも、西村先生の最初のひとこと「ばくはしゃべりすぎるから...」(m i t o 気をつけなうちや、と言ったと思う)で、なんだかスコーンと気が抜けてしまった。身構えることなく何も必要なかった。自分をよく見せようなんて、いみじい気持ちになつてしまった。これが本当に大学の公開講座なのかしら...

m i t o ばくは授業でもいつも最初の10分ほどの立ち上がりが重いのです(;;)。不安のせいだと思えます。でも、そのばやきともいいます。

言葉が「有効技」? だったなんて、意外です。儀式のようにしやほばらずに、のびのびと好奇心を働かせる。これが高等教育や学問のあり方だと思えます。ばくは、これを、知的水平空間と呼んでいます。

■こんな軽いノリでいいのだろうか...。ん、慣れればこれもなかなかいい。聞きながら「m i t o 出席ペーパーを書くのはつらい。時間が足りらん。開放講座では私は一度は

居眠りするのですが、今回はありませんでした。またお茶飲ませてください。

mitoの飲食自由です。フランス革命も市民のコーヒーを飲みながらのサロンが学習？や合意形成？の場であったとか。それから、出席ペーパーについては、慣れもありま

すし、あるいは相性(たとえば集中して受講していたい人は書けない、でも、それはそれでいい)の問題もあるでしょう。気にしないでください。出席ペーパーの本質は「何でもアリ」と「自己表現の安全自己管理システム」にあるとは私は思っています。マル秘、強制公開、発信者名公開、コメント希望、コメント不可など、どんなマークをつけていただいてもけっこうです。

5 幸せを感じるときに 気づく

第2回はブレインストーミング「幸せの瞬間」をカード式発想法(紙切れ法)で行った。ばくのねらいは次のとおりである。

- ①他者に対する共感的理解が可能であることを実感する。
- ②自分とは異なる枠組をもつ他者と与えるよい影響を知る。

③アンビバレンツ(両面価値)な実感を受容できるようになる。

出席ペーパーは次のとおりである。■(当日は)日本シリーズがなくてよかった。

mitoはい、あつたらもつと少なかったでしょうね。

■他人を「受け入れる」と「受け流す」って、表面的には似て見えるような気がします。どうでしょう？

mito「受け入れる」を「許す」に変えると、きょうのロールプレイでやる課題です。なんてつながるんだろ。不思議だな「許し」というのは「主張する」「断る」があつてこそ「許し」なんです。

■幸せを感じるときって、若いときよりなんだか少なくなってきたように思うのは何ででしょう？ それにしても人数が少なくなっているの何ででしょう？

mitoに楽しい講座なのにね。

mitoの社会教育の場合、学校教育と違って、7割も出席すればすごい。個人がさまざまな事情のなかから自己決定で参加してくる。ただ、お金をもらっている関係から、ばくにとつてはプレッシャーである。

■女子大でブレインストーミングを行つたとき、2/3が退席？ 残つて何だろ。今日のワークシヨもつと人数が多かつたらおもしろかつたと思う。

mito今日お願いトレーニングのほうより過激である。加藤諦三が、現代の心理的特徴を「敵意と不満」として、次のように述べている(敵意と不満の自立＝中毒社会という点について、略。そういうなかで、今日のトレーニングは「さわやかに依存しちやおう」ということだから、やつぱりカルチャーシヨックが強すぎるのでしょう。でも、加藤のいう「ふれあい」を、ばくはストロークと呼ぶ。人間はストロークをもらうために生きているという。まあ、楽しくやりましょう。

■女の人は、子どもとか、他者評価で生きている。これつていったいなんだろ。

mito適正な自己評価のあり方について説明。ストロークのついて横文字というところ、ジェンダー(社会的文化的性差)という。ただ、最近、男性のほうは社会的弱者のようない気がする。自己決定活動になささわろうとするとき、変化を理由なく

恐れるのである。

■紙切れ法はとてもおもしろかつた。幸せを感じたときは十人十色だけど、共感するものも、ん？ と思つたものもあつた。時間が足りなくて残念。もつとやりたかつた。

mitoやつぱり、ワークシヨツプは、ばくなんかがいなくて、仲間同士で楽しくみっちりやるのが本当なんだろう。

6 ハートが疲れた ロールプレイ

第3回はロールプレイ「お願いトレーニング」を行つた。ばくのねらいは次のとおりである。

- ①フラストレーションに耐えて自己主張を続けられるようになる。
- ②ちよつとしたことぐらいいは負け犬にならない自信をつける。
- ③人それぞれの自己主張法を知り、自分の主張法を改善する。

出席ペーパーは次のとおりである。

■お願いすることも断るのもとても苦手です。要するに人が良すぎる。長所であり、短所です。今日のワークシヨツプはハートが疲れた。mitoすみません。たしかに人

7 自分の価値観に気づく

第4回は「価値観ゲーム」(前掲坂口)を行った。ばくのねらいは次のとおりである。

- ①自分らしさについて再確認する。
- ②他者に対する関心の持ち方を体得する。
- ③自分さがしをする現代人のことを理解する。

テーマは結婚相手の判断基準(一対比較法)とし、図表●のような結果となった。数字は順位であり、コメントは本人の判断基準である。

出席ペーパーは次のとおりである。

■愛情のある暴力はないと思いきや、今日(は)価値を選択するのが難しかった。容姿はやっぱりキムタク+竹野内豊みたいな人がスキなの。なぜ?! 心って正直だわ。愛情1位なんて。

mito容姿1位ではなく、愛情1位だったことで、心って正直というの、とても面白く感じました。

■他人に肯定的関心をもつ…共感能力に自信がないので、心してつとめよう。

■自分はこんな価値観をもっている

ようか。

■どうして少ないのかなあ。本当にもったいない。楽しい授業なのに。

「今の女はジェンダーフリーだ」と mitoさんは言っていました。

うでもないですよ。学生のころなら平等だったかもしれないけど、社会、家庭ではジェンダーバイアスがあります。なぜ、女は黙ってしまおうのでしょうか? 愛しすぎる女…女になっちゃうんですよ。

mitoのように、講義のテーマと関係ない出席ペーパーも、不思議に講義と連動して重要な刺激を投げかけてくれます。講義はライブだ、というところなんでしょう。

mito付記

…ということ、今回は少し過激すぎたようです。終了後例によって、フリースペースをやりましたが、みなさん、心がしんどかったようです。今回のトレーニングの基盤となる、言いたいことは言っていないんだよ。どういかなるよ」という支持の風土の共生社会を、今後敵意と不満の自立・中毒社会全体では無理でもこのワークショップだけでもゆつくりと創り出していきたいと思います。

れど、そういうふうに思うのです。

■男は女の涙には弱いつてことか mitoははは。たしかに弱気とは思います。ただ、あなたが、どうかしてちょうだいという依存的な涙はいやですけど、とにかく泣かせてという涙はいいもんですね。

■自己主張はしたいのですが、意志が弱いのので発言はしないで終わることがほとんどです。上手に話ができればと思います。

mito上手な話し方のほうは、上手な自己開示のほうに深く関連しているのではないのでしょうか。自己主張のほうは、自他への信頼感の獲得が大きいと思います。

■ロールプレイの目的と違うかもしれないませんが、相手の考えていることを早くつかまないと断れないし、お願いできないと感じました。また、1回ロールプレイすると、普通の会話より同志的な感じになって、おもしろかったです。でも、少しストレスになりましたが。

mito同志的になる、というのがおもしろいですね。あれだけ、断ったり、逆にずうずうしくお願いしたりするの、そこにこそ信頼関係が生ずるということではないです。

がよいのは、長所であり、短所でもありますね。まあ、そこが自分らしさなのでしょうか。ただ、「生きづらい」と感じたときには、少しかの物語を取り入れるとよいのかもかもしれません。

■お願いすること、それもあつかましくすることは、とっても大変だった。心のすみて、ああ、申し訳ないなあと思いつながらグレイしていたから、それがかえってストレスになったかな? でも、また演じてみたい気もする。

mito聞けつて「あつかましくすること」だけが「お願い」の方法ではないでしょうか。他者のいろいろな方法から、取り入れられるものは取り入れられればいいです。■頼むのも断るのも難しいです。基本的に頼まれた場合は、できることならだいたい受けるんですが、頼む場合は一度断られたら、何度も頼むことはしないです。

mito頼むのも断るのも2回目からが難しいんですよ。もう、いいやという感じで。でも、ほんとうの許しは断りのあとにくる。そこそが「信じて頼りあう信頼」の本質だ。現実には難しいかもしれないけ

図表 結婚相手の判断基準（6列で6人分、数字はその人にとっての優先順位）

容 姿	4	7	6	4	3 自分にないから	1 タイプの問題
人 柄	2	1	1 愛にはマイナスも	3	4	2
資 産	6	6	5	7	4	5
愛 情	1	1	2	5	1	4
将来性	3 向上心を表す	5	4	2 生きる姿勢を表す	4	3
健 康	5	1	3	1 生きてなきゃね	2	6
経 歴	7	4 生き様を表す	7	6	7	7

たんだなあと、あらためて思った。でも、このゲームをプレイする前の自分の予測と違っていたのは意外だった。価値観って、一生変わるこ

■学習の意味合いなのではないか。自分の価値観がはつきり出ることに驚きました。各人それぞれの価値観が異なることが面白かったです。

とはいいのかしら……。mitoの日々、どんどん変わっていくのて

mitoこそ、意外に思われるでしょうが、他者の価値が自分と異なることは、そこに支持の風土があるという条件のもとに限り、「面白い」ことなんでしょうね。

■「言いたいことは言っていないんだ」という社会の実現は難しいでしょうねえ。その言葉は、社会を構成する各個人に対して、かなり高いレベルの要求を出しているように思います。やっぱり言わないほうがいいことというのはあるわけて……でも、言いたいことを「タブー」として必要に言わないというのもどうかと思う。落としてどこが難しいですね。

mitoは現実社会、現実の人間関係ではそうでしょうねえ。その場合「落としてどこ」という表現がとてもびびったりしていると思います。ただ、受容的、支持的雰囲気があるものとあればいいのになと思います。

■今の若い人（二〇代以下）って自己開示しないでね。安心してコミュニケーションできる場面がないのかもしれない。人と違っていていいという安心できる社会がないのかも。今回のワークショップで、容姿が一番でしたが、容姿は人柄で

す。よくばりな私です。愛って何ですか？（フリースペースにて飲みながら執筆）

mitoの自己開示については、ジョハリの4つの窓という考え方があって、たしか、自分も相手も知っている自分の窓（領域）を広げればいい、ということだったと思います。が、「ちよつとどうかなあ」とよくは思っちゃいます。それよりよくは「開きたい自分（のカケラ）を開きたい所で開けたい」というレトリックを作っています。

8 「あげる」と「もらう」だけの相互協力

第5回は「スクエアゲーム」（前掲坂口）を行った。ばくのねらいは次のとおりである。

- ①相互協力過程を理解し、他者を配慮する経験をもつ。
- ②集団の形成プロセスについての理解を深める。
- ③ネットワーク的なキープ・アント・テイクの精神を理解する。

出席メンバーは次のとおりである。■秋の講座は終わってしまったけれど、これから何かが始まるような気がする。

mitoの秋の講座は、たまり場居場所を開始するための雰囲気づくりをした、というところですかね。

■ポーカーフエイスでいることのむずかしさ。言葉も表情も出さずに、相互協力をするということは、日常経験していないだけに、とても大変なことだった。今日は秋の最終回だったけど、結構楽しい講座でした。冬も続けます。よろしくお願いします。

mitoの説明不足だったかもしれないが、このゲームのねらいは、ポーカーフエイスというよりも、言葉で話したり、指図してはならないという意味で沈黙であり、カードをほしいという目つきをするのも禁止、ということですが、でも、そういう各人の自発性に基づく「あげる」と「もらう」だけの相互協力が、ネットワークのギブ・アンド・テイクのあり方を教えてくれているのでしよう。

■途中参加で戸惑いましたが、メンバーに救われて、すぐにゲームに参加できました。意思表示ができないのが、こんなに大変なことなんだと思いました。しきりない

自分がかつりして、面白かったです。今回の講座に参加して、緊張した

り、勇気をふりしぼったりと、普通の講座とは違って、自分の確認が少しかたかなという感じでした。

mito「しきりない自分」の発見は意外だったでしょうね。

■自己開示については先生のご意見と同じです。スクエアゲームでは全体を見る目が全然ないことに気づかせられました。インターネット、パソコンについては何もわかりません。まったくの機械音痴です。ちよつとのおどきただけです。迷惑とは思いますがよろしく願います。

mito「どうぞ、お気軽に徳島大学公開実践センターにのぞきできてください。」

■秋期の講座は今日で終わります。これから裏講座や冬講座、合宿等て楽しくなりそうです。よろしく願います。

mito「裏講座」というネーミング、ばくちも気に入りました。さっそくバクちさせてもらいます。

■今日で一応私らしさのワークショップIが終わりでしたが、11/24

から、また、みなさん、そしてmito chanにお会いできるといいます。あつ！きょうの感想、ポーカーフエイスはむずかしい……。

mito「喜んでもらえてうれいしです。『そんなの、別にいらない』といわれそうで不安だったのです。まあ、裏講座ですから、どなたでも、無理せず、来たいときに来てください。」

9 裏講座で多角的交流

「裏講座」第1回は、職員旅行中に神戸から寄つてくれたメル仲間、A市公民館主事Sさん（前出）をお迎えし、「最近食べたおいしかったもの」を含めた自己紹介をした。話題は、「なぜ、このワークショップに参加しているか」などであった。その後のフリースペースで痛飲してしまひ、くわしい内容は思ひ出せない。フリースペースには、K君や徳島市社会教育課のO君も、忙しい仕事をなんとか終わらせて駆けつけてくれた。受講者には次のメッセージを送

った。「事情で秋の表講座に数回しか出れなかった方なども、もしよろしければ、お気軽に裏講座やフリースペースでのおしゃべりにご参加いただければ幸いです。また、西村美東士までお申し付けいただければ、欠席されたときの資料を差し上げます。なお、受講メンバーの一人Yさんのホームページ開設の申し入れを受け、さっそくアップしました。アドレスは下記のとおりです。略」

第2回は、もう、みんな飽きたころかな、と危ぶんでいたが、フリースペースから遅れて参加した人を含めると、女性3人、男性1人とぼくのぎやかなおしゃべりになった。おしゃべりしていたら、これがいろいろとNPOやっている人だちだった。LD（学習障害）児・ADHD（注意欠陥多動性障害）児自覚グループ関係もあれば、特定の病気の子どもをもつ親の会（だったか）関係もいて、飲んでいて話題になったのは、異種グループ（主に障害者グループ）のネットワークのことで、

飲みながら多彩な「裏講座」

まず障壁になるのが、私たちの種類の障害の程度が軽いからというよ

うなグループ同士で連

帯しづらい風土についてである。これを徳島県の保健行政が、異種を乗り越えて障害者グループのネットワークを仕掛けていた。これに励まされたグループがたくさんあるようである。

徳島県行政も、進んでいる所もあるんだ、という当たり前の結論に落ちついた。まあ、べつに、どうしてもネットワークに加わらなさいいけないというわけでもないのだけれど。それからジェンダー問題がつねに話題に入っている。一人の人間に、全部の課題がからんでるんだなあ、という感じである。

次のメッセージを送った。「ホームページを作る条件のない人には、ばくが半分仕事として提供しています。ほかの人たちも、関心を示していました。ただ、初期投資の15万円程度が厳しいようです。まあ、ほかのところで、無料のメールアドレスを取得して、とにかく始めてみたら、と言っています。LD児関係のアドレスは(略)です。今のところ、ただ載せただけ、という感じですが見てやってください。なお、次のような欠席連絡がメールで入ってきました。(略)」

第3回は、女性1人、男性2人とばくが参加した。そのほか、徳島市ヤングフェスティバルの実行委員の若者が2人、手作りのOH P利用の野外映写装置をテストしにきて、ちよつとおしやべりした。12月19日のヤングフェスティバルは、ロマンチックなイベントになりそうである。まだ、8時が過ぎて、これからフリースペースに行こうという矢先、徳島在住の違う大学の女子学生が友人2人(全員ギャル)を連れて来てくれた。

Kさんが、先週の日曜日にやった駅伝の記録表と写真アルバムをもつてきてくれた。N大学留学生の「Asian Express」というチームである。31チーム出場で、なんとトップランナーはKさん。しかも、なんと、区間順位も最終順位も31位である。でも、そのあとのパーティーの写真を見せてもらったら、とてもゆつたり交流できて楽しそうだった。

参加者の一人、韓国のIさん(韓国・仁川市出身。仁川教育大学校数学科教育科に在籍し、交換留学生として今年10月に来日。現在はN大学学校教育学部3年に在学中)の徳島新聞12月8日の記事(略)を紹介し、次

のようなコメントをインターネットに発信した。

うーん。ばくはこの文章にとっても好感をもちました。みなさんはいかがでした。ただ、Iさんが留学して、そのような先入観(日本人は礼儀正しく、親切でもあるが、それ以上の親密な関係に発展するのはなかなか難しい)は間違っている。と気になったのは、徳島だったからかもしれない。東京だったら、どうかなあ。それから、なんといつてもあのやさしいスマイルのKさんも、そこにいたしねえ。

Iさんも含めた鳴門教育大学の留学生の「アジアンエクスプレス(どこがじゃー)の人たち(韓国、カンボジア、ミャンマー、メキシコなども、場を設定してくれたら、鳴門から来てくれるんじゃないかということ。す。『私らしさのワークショップ』で交流料理パーティーでもやりませんか?」

第4回は本年最後の裏講座だった。女性2人、男性2人とばくが参加した。そのほか、ヤングフェスティバルのKさんがタイのJさん(来ていたというので、仕事を中抜けしてフリースペースに会いに来てくれた。KさんがJさんを連れてきて

てくれたので自己紹介をした。Jさんは、タイのある体育大学の教師(柔道)で、日本では生理学を勉強中である。

フリースペースでJさんは、日本の女の人(が)わからない、という話になった。ちなみに彼は独身である。その結果は、「日本の女の人(は)心で思っていることを言わないから」ということになった。でも、フリースペースでは、日本人のばくたちがビールを飲んでるのに、熱帯の日本酒を飲み、「いっしょにお酒を飲める人がいつもは少ないから」ということまでこぼれてあった。ばくたちの雰囲気(フレインドリーな雰囲気)で楽しい」と言ってくれた。

なお、女子学生のKさん(も)も参加してくれて、活気のある裏講座になった。彼女はポケベル(文字)の話で、は、ちょうど高校時代に当事者だったの、とても面白かった。以前報告した「絵文字」についても全部知っていた。また、中学時代は数字のポケベルだったの、その話も聞いた。「当時の子たちはケータイやじを本当に馬鹿にしていたの?」と聞いたところ、そうだったことである。

(以下、次号に続く)